

Abert's Opera "Astorga" and Josef Strauss's Potpourri Based on the Same Opera

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若宮, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/171

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



アーベルトのオペラ《アストルガ》と ヨーゼフ・シュトラウスのポプリ

Abert's Opera "Astorga" and Josef Strauss's Potpourri Based on the Same Opera

若 宮 由 美

WAKAMIYA, Yumi

The piano score of a potpourri based on Abert's opera "Astorga" that was arranged by Josef Strauss was published as No.105 of the series named '*Anthologie Musicale*' by the Viennese publisher C.A. Spina. The original German opera "Astorga" by J.J. Abert was premiered in Stuttgart on May 27, 1866, and was performed in Vienna on July 30, 1870. This opera was praised in Germany, but wasn't accepted in Vienna. Although Josef Strauss with the Strauss-Orchestre performed fragments from "Astorga" on June 18 and 21, 1867 in Viennese Volksgarten, there is no evidence that Josef's potpourri based on "Astorga" was played. The potpourri was constructed by motifs of six numbers in the first and second acts of the opera, and the motifs from third act were not cited. It is unclear why did Josef Strauss arrange this potpourri, and the publication process of this potpourri was very peculiar in the series of '*Anthologie Musicale*' which handled popular and famous works.

1 序：研究の動機

『埼玉学園人間学部紀要』第14号の拙稿（若宮2014）に記したように、筆者は2014年3月にオーストリア国立図書館でヨーゼフ・シュトラウス Josef Strauss（1827-70）によるポプリ2曲を発見した。2曲はともにウィーンの出版社C.A.シュピーナ Spina社が出版した '*Anthologie Musicale (Musikalische Blumenlese). Fantaisies en Forme de Potpourris sur les Motifs les plus favoris d'Opéras*'（以下、『ポプリ選集』と表記）と題するシリーズ¹⁾に含まれるもので、ひとつ

はアーベルト Johann Joseph Abert（1832-1915）の独語オペラ《アストルガ Astorga》、もうひとつはグノー Carles Gounod（1818-93）の仏語オペラ《ロメオとジュリエット Roméo et Juliette》²⁾に基づくポプリである。若宮2014では後者を扱ったが、論文発表後、シュトラウス研究の大家から、「これらはいままで誰も存在を知らなかった楽譜の発見である」というお墨付きを得た³⁾。新発見のポプリについて論じることには意義があるという確信を得たので、本論では未考察の〈アストルガに基づくポプリ〉について考察していく。ここで扱うポプリは、「オペラ・ポプリ」の

キーワード：アーベルト、オペラ、アストルガ、ポプリ、シュトラウス
Key words : Abert, opera, Astorga, potpourri, Strauss

曲種に属する。オペラ・ポプリは、「[オペラの中の] 最も重要かつ効果的なメロディーだけを使って、原曲であるオペラの劇構成を配慮せずにつなぎあわせた曲であり、新しく作曲した移行部を含むことがある」(Ballstaedt 1997: 1760)。「20世紀の大衆音楽ではメドレーと記されるもの」(Ballstaedt 1997: 1761)である。つまり、ポプリはオペラと密接な関わりを持ち、原曲であるオペラからモチーフを引用して構成される楽曲を指す。しかし、実際にはオペラだけでなく、オペレッタやバレエなどの劇作品からモチーフを引用した作品も存在することから、ここでは範囲を広げ、いわゆる「オペラ・ポプリ」とは、劇音楽からモチーフを引用して作られた作品と定義する。ヨーゼフ・シュトラウスによる〈アストルガのモチーフに基づくポプリ〉は、同名オペラのモチーフを引用した楽曲であるので、原曲であるオペラ作品から考察を始める。

2 アーベルトのオペラ《アストルガ》

オペラ《アストルガ》は、アーベルトが作曲した3幕構成の独語オペラである。アーベルトは1832年にボヘミアに生まれ、1915年にシュトゥットガルトで没した。プラハ音楽院でコントラバスを学び、1852年にヴュルテンベルク王国の首都シュトゥットガルトにて、宮廷楽団のコントラバス奏者、67年には同楽団の楽長に任命され、88年までシュトゥットガルト歌劇場を率いた。作曲家としてのアーベルトは、どちらかといえば器楽曲の作曲で知られ、オペラは6曲にすぎない⁴⁾。《アストルガ》は彼の3作目のオペラである。

2.1 オペラ《アストルガ》の制作・初演

《アストルガ》の台本は、ケルン生まれのパスケErnst Pasqué (1821-92) が執筆した。パスケは、パリ音楽院で学んだバリトン歌手であり、1845～59年にダルムシュタット、ライプツィヒ、ヴァイマルのドイツの諸宮廷に仕えたが、喉を壊して歌手を引退してからは演出家、台本作家、劇場支配人として活動した。アーベルトの息子ヘルマン Hermann Abert (1871-1927) が著した父の伝記 *Johann Joseph Abert* によれば、「[父は]すでに1864年に、当時ヴァイマルの上席演出家であったエルンスト・パスケから、イタリア人作曲家エマニュエル・ダストルガのロマンティックな運命を描いたオペラ台本を提供された」(Abert 1983: 68)。これは実在の音楽家を題材にした台本であった。

アーベルトは、オペラ《アストルガ》を1866年初頭に完成させ、同年5月27日にシュトゥットガルトの宮廷歌劇場で初演を果たした。指揮は作曲者自身が執り行った。その後は、同年7月12日にバーデン＝バーデン、10月29日にライプツィヒ、12月4日にプラハ(ドイツ語上演)を経て、70年7月30日⁵⁾にウィーン、78年にバーゼルとプラハ(チェコ語上演)、88年にボズナニで上演されるに至る。同オペラのピアノ譜はライプツィヒのブライトコプフ社から初演年の66年に出版され、ヴュルテンベルク国王カール1世 Karl Friedrich Alexander von Württemberg (1823-91) に献呈された。

2.2 オペラの内容・物語

オペラの場面設定は18世紀初頭である。あらずじが、ウィーン上演の手引きとして1870年7月30日付の *Wiener Abendpost* 紙 (p.13)

に掲載されているので、それを引用する⁶⁾。

「第1幕。アストルガは〔パルマ公女の〕エレオノーレと秘めた恋に落ちるが、彼女の伯父は祝祭の場で姪と総督の婚礼を告知する。アストルガは直感的に、総督が父を殺した犯人と気づき、民衆の面前で公女への熱烈な恋を暴かれたことを恨む。一方、総督は怒り、アストルガを刺そうとするが、アストルガの愛弟子であるアンジョレッタが2人の間に飛び出し、気絶したことで、総督は怒りを収める。アストルガの弟子たちはアンジョレッタを運んでいく。

第2幕。アストルガはパルマ郊外に逃げ、隠遁生活を送る。アンジョレッタはこの芸術家を世話し、ここで彼は〈スタバト・マテル〉を創作する。アンジョレッタの美しい声と容姿が評判となり、それを聞いた皇帝レオポルト1世は、彼女をウィーンに連れてこようと企て使者を送る。しかし、アンジョレッタはウィーンに行くことを拒み、師匠への忠誠を誓うが、危険が迫っていることも察する。総督の妻が夫のアストルガ殺害計画を知り、アストルガに伝えるために決闘の場所に姿を現す。しかし、夕闇のなかで裏切りを責める夫の手で妻は捕えられる。この場面で、アストルガが転んで総督へ倒れかかり、総督を殺してしまう。公衆の前で絶命しつつあった総督は歌手が殺人犯だと説明し、彼の死を求める。アンジョレッタは師を助けるために、ついには使者の要求をのみ、ウィーン行きを決意する。使者は、総督は殺害されたのではなく、正式な決闘で敗れたと説明する。いよいよウィーンへ出発する時、アンジョレッタはアストルガに別れを告げる。アストルガは意識がぼやけ、エレオノーレの保護下で幻覚を見続ける。

〔第3幕〕。2年後、アストルガの精神は狂気の中にあった。そこにアンジョレッタが皇帝の宮廷〔ウィーン〕から戻ってくる。彼女は師の病気を治すべく献身する。アストルガの感動的な狂乱場面の後で、彼は突然、自作の〈スタバト・マテル〉を歌うアンジョレッタの素晴らしい歌声を耳にする。エレオノーレの努力は無駄であったが、心の解放を願うアンジョレッタの愛と哀訴で、歌手の心は動かされる。彼女の声に応えて、「ここだ、ここだ、ああ！アンジョレッタ！」とアストルガは叫び、正常な思考と精神を取り戻し、救われる」。

2.3 実在のアストルガ

オペラの登場人物はほとんどが実在の人物であり、物語は主人公アストルガの人生をなぞらえている。実在のアストルガについて、1870年7月30日付の*Wiener Abendpost*紙(p.13)は、次のように説明している⁷⁾。以下の説明はオペラ的前提でもある。

「アストルガは古いスペインの町の名である。(中略) オペラの主人公はこの町の修道院に長らく滞在していたので、町の名に因んでエマニュエル・ダストルガ Emanuel d'Astorga と呼ばれた。彼は1680年頃にシチリアに生まれた。父はそこの有力騎士であったが、スペインの政治的な陰謀に巻き込まれ、1701年に謀反人としてパレルモで処刑された。母と息子は強制的に処刑に立ちあわされ、母はショックと悲しみのせいでその場で息絶えた。その後、息子はふさがちになり、慈悲深い女性によってフィリップ〔フェリペ5世〕の宮廷に連れていかれ、アストルガにある修道院で育つ。しかし、彼の姓は剥奪されたままであった。

修道院でエマニュエルは音楽に身を投じ、歌と作曲を学ぶ。やがて修道院を離れてパルマ公の宮廷に赴き、君主の姪エレオノーレ公女と恋に落ちる。パルマ公は2人の仲を許さず、エマニュエルを音楽好きな「神聖ローマ帝国の皇帝」レオポルト1世のもとに送る。アストルガは長らくウィーンで暮らし、マドリッド、リスボン、パリ、ロンドンへの旅を経験する。そしてボヘミアが彼の最期の地となり、その地の修道院で息をひきとる。彼に関する記述は少ない。（中略）エマニュエルの楽曲のうち、〈スタバト・マテル〉はいまでも有名で、牧歌的なオペラ《Daphne》は1726年にブレスラウで上演されている。バーニー博士は、その他の作品、〈Quando penso〉〈Torne Aprile〉〈In questo core〉を称讃した」。

上記記事にもあるように、アストルガという謎につつまれた人物については、当時のウィーンではあまり知られていなかったとみられる。ただし、宗教を重んじるウィーンの教会で彼の〈スタバト・マテル〉が歌われていたことは確かだと推測される。

2.3 シュトゥットガルト初演の評価

シュトゥットガルトにおける《アストルガ》のオペラ初演は大成功を収め、「作曲者の人生に最大の成果をもたらした」（Abert1983: 68）。ライブツィヒで週2回発行されていた *Neue Zeitschrift für Musik* 紙⁸⁾の1866年6月8日付第24号でも、「アーベルトの《アストルガ》がシュトゥットガルトで上演され、異例の喝采を得た。（中略）作曲者（宮廷のコントラバス奏者）自身が指揮を執り行い、各幕の終わりに嵐のような叫び声、さらには花や月桂樹が浴びせられた。翌日には、[ヴェルテンベルク]王との特別な謁見を賜り、音楽監督に

任命された」（p.6）。同オペラは「『ローエングリン』以来の重要オペラ」（Abert 1983: 59）とドイツで絶賛され、それが各地での上演につながった。

3 オペラ《アストルガ》のウィーン初演

3.1 カール劇場での上演

一方、《アストルガ》のウィーン初演は、シュトゥットガルト初演から3年を経た1870年7月30日にカール劇場で行われた。当時のカール劇場はオペラの常設劇場ではなく、オペラ公演のために有能な歌手を外部から招かねばならなかった⁹⁾。表1に《アストルガ》の配役表を示した（左に役名と声種、中央にシュトゥットガルト初演の配役、右にウィーンの配役を示した）。ウィーン公演にはシュトゥットガルト初演に参加した2人の歌手が参加した。その他の歌手もほぼ全員が客演である。主役であるアストルガ役のゾントハイム Heinrich Sontheim（1820-1912）、バルバチェス役のシュツキー Franz Joseph Schütty（1817-93）、パルマ公ファルネーゼ役のロスナー Wilhelm Rosner（1826-82）の3人がヴェルテンベルク宮廷歌劇場（＝シュトゥットガルト宮廷歌劇場）、アンジョレッタ役のステツラ Giovannina Stellaがフランクフルト市立劇場、ラウリスタン伯役のヒネク Frantisek Hynek（1837-1905）がレンベルク市立劇場¹⁰⁾

表1：オペラ《アストルガ》の配役

	Stuttgart 1866	Wien 1870
“Francesco Farnese (bass)”	Wallenreiter	Rosner
Eleonore (soprano)	Leisinger	Löscher
Barbaces (baritone)	Schütty	Schütty
Astorga (tenor)	Sontheim	Sontheim
Angioletta (soprano)	Klettner	Stella
“Graf von Lauristan (bass)”	Robicek	Hynek

からのゲスト歌手である。指揮はカール劇場楽長であったスッペ Franz von Suppé (1819-95) が務めた。

カール劇場での《アストルガ》は、同劇場の第10回オペラ公演（7月30日）と翌日の第11回公演の2回で終わった。ちなみに、同年のオペラ公演は計18公演であり、このうち全曲上演が14回、ガラ公演が3回である。全公演で客演歌手が主要な役を演じている。全曲公演の演目と上演回数は、アダン Adolphe Adam の《ロンジュモーの郵便屋 Der Postillon von Lonjumeau》とボイエルドュー François-Adrien Boieldieu の《白衣の婦人 Die weisse Frau》が4回、ドニゼッティ Gaetano Donizetti の《愛の妙薬 Der Liebestrank》3回、《アストルガ》2回、フロート Friedrich von Flotow の《マルタ Martha》1回、ガラ公演が3回である¹¹⁾。

3.2 主演歌手ゾントハイム

カール劇場で《アストルガ》がウィーン上演されたのは、主演歌手ゾントハイムによるところが大きい。そもそも《アストルガ》は「ゾントハイムのために書かれたオペラ」だからである（1870年7月30日付 *Wiener Abendpost* 紙, p.13）。彼はシュヴァーベンを代表するヘルデンテノールであり、1868年にウィーンに初登場し、宮廷歌劇場に出演した¹²⁾。ユダヤ教徒の家庭に育ったゾントハイムは、エキゾチックな役柄で卓越した力を発揮し、とりわけアレヴィ Jacques Fromental Halévy による《ユダヤの女 Die Jüdin》のエレアザルが当たり役であった¹³⁾。ウィーンでも同役で大成功を収め、68年にウィーン宮廷歌劇場で上演された《ユダヤの女》の8公演すべてに彼が出演した¹⁴⁾。

当然、1869年にも宮廷歌劇場への出演が期待されたが、実際は違った。シュトゥットガルト宮廷歌劇場に籍を置く彼にとって、勤務地外で客演できるのは夏に限られる。それとは逆に、ウィーンの諸劇場でも夏季はアーティストたちが休暇を取る時期であった。そうした夏の人手不足を補う目的で、カール劇場の監督アッシャー Anton Ascher (1820-84) はゾントハイムに白羽の矢をたてた。かくして、69年夏にゾントハイムはカール劇場と契約を結び、《マルタ》と《ロンジュモーの郵便屋》の全曲上演のほか、お得意のエアレザルのアリアを歌う《ユダヤの女》第4幕などから構成されるガラ公演に出演し、大成功を収める¹⁵⁾。カール劇場の夏季オペラ公演は、ひとえにゾントハイムに支えられていたといっても過言ではない。翌70年夏、彼は再度カール劇場と契約を交わし、すべてのオペラ公演に出演している。ここでの演目選びは、彼に委ねられていたと考えられる。したがって、《アストルガ》もゾントハイムの意向で決定されたのであろう。このオペラの稽古は、上演当日の「午前10時から午後2時まで」のわずか4時間だけだったという（1867年8月1日付 *Wiener Abendpost* 紙, p.8）。

3.3 ウィーン上演に対する評価

オペラが2回しか上演されなかった事実から明らかなように、ウィーンにおける《アストルガ》の上演は完全な失敗であった。上演翌日の *Fremden-Blatt* 紙は「公演はわれわれをひどく落胆させた」（1867年7月31日, p.5）、8月1日付の *Blätter für Musik, Theater und Kunst* 紙は「退屈なオペラについて書くことは不必要」（p.2）と断じている。さらに、8月2日付の *Neue Freie Presse* 紙は「重責

を担ったゾントハイムのパフォーマンスはすばらしかった。芸術家たちも、卓越した歌手であり、役者であることをこの晩に証明した。（中略）作曲とオーケストレーションを手がけたアーベルトだけがひどかった」（p.8）と評した。

失敗の理由は何か。練習時間が少なかったことや、主人公となった実在のアストルガからの旋律引用が多く、独創性に欠ける点などが指摘されている¹⁶⁾。とりわけ〈スタバト・マテル〉は序曲、第2幕No.5、第3幕No.12に繰り返し引用されており、マンネリを招く要因になった。さらに、部分的に顕著であるヴァーグナー趣味も批判をあびた¹⁷⁾。

4 シュトラウスと《アストルガ》の関わり

ヨーゼフ・シュトラウスのポプリ〈アストルガ〉に目を向ける前に、シュトラウス楽団とオペラ《アストルガ》の関係をみていくことにする。シュトラウス楽団とは、シュトラウス一家が経営する楽団のことであり、父ヨハン・シュトラウス1世 Johann Strauss (1804-49) が設立し、父の死後は息子であるヨハン・シュトラウス2世 Johann Strauss (1825-99) に継承された。工業技師であったヨーゼフは1853年頃から楽団の経営に携り、60年代には兄に代わってシュトラウス楽団楽長の職を弟エドゥアルト Eduard Strauss (1835-1916) とともに担っていた¹⁸⁾。

シュトラウス家ならびに楽団に属する全資料（楽譜を含む）は、1907年10月に当時の家長であったエドゥアルトが焼却したために、一次資料はほぼ失われた。したがって、シュトラウス研究に際しては二次資料が研究の典拠となる。楽団の活動を知るには、当時の新

聞・雑誌を調査する以外に手立てがない。今回の調査では、演奏会の演目が記されている *Fremden-Blatt* 紙（以下FBと略）と *Neues Fremden-Blatt* 紙（以下NFBと略）を参照した。

4.1 演奏会のプログラム

当時の新聞を眺めると、1867年6月18日付のNFB紙に、その日にフォルクスガルテンで開催される「ヨーゼフ&エドゥアルト・シュトラウスによる演奏会」の広告が掲載されており、以下の5曲が「新しい作品」として掲げられている（p.23）。1.グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》からの抜粋（a.結婚行進曲 Cortège Neptial、b.ジュリエットのまどろみ Le Sommeil de Juliette、c.最終の二重奏）、2.アーベルトのオペラ《アストルガ》からバルカローレと騎士の合唱、3.ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈戴冠の歌 Krönungslieder〉[op.226]、4.エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・マズルカ〈心と心を通わせて Herz an Herz〉[op.27]、5.エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈縦横に Kreuz und Quer〉[op.28]。若宮2014に述べたように、このコンサートで《ロメオとジュリエット》からの抜粋も初めて演奏されている（若宮2014: 80-81）。

次に〈アストルガ〉の名がみいだされるのは、1867年6月21日付のNFB紙である。この日にフォルクスガルテンで開催される演奏会はヨーゼフ&エドゥアルト・シュトラウスのための慈善演奏会で、内容は18日とまったく同じである。FB紙の場合、18日の演奏会演目は記されていないが、この日の演目が記されている。21日の広告を図版1に示す。この広告では、下から2行目左端に作曲者アーベルトの名前が記されているが、名前の綴りが



図版 1 : 1867年6月21日付FB紙の演奏会広告



図版 2 : J. シュトラウスのポプリ 〈アストルガ〉

“Aubert”と間違っている。それほどにアーベルトはウィーンでは知られていなかったのであろう。

次のフォルクスガルテンの演奏会は、6月25日に開催された。この日の演目に《アストルガ》の名はなく、他の4曲は演目に残されている¹⁹⁾。つまり、《アストルガ》からの抜粋はわずか2回しか演奏されずに、姿を消したことになる。2回だけ演奏された抜粋は、どちらもオペラ第2幕のNo.6のナンバーから選抜されている。No.6冒頭の6/8拍子による〈バルカローレ〉と、続く2/4拍子による〈騎士の合唱〉が抜粋箇所と想定される。そして、本論文のテーマである〈アストルガに基づくポプリ〉は演奏された証拠がみつからなかった。

5 〈アストルガに基づくポプリ〉

5.1 シュピーナ社による楽譜出版

ヨーゼフ・シュトラウスによるポプリ〈アストルガ〉の楽譜をみていこう。冒頭部分を図版2に示す。

楽譜の左上に『ポプリ選集 No.105』、右に“Arrangirt von JOSEF STRAUSS (ヨーゼフ・シュトラウスによるアレンジ)”の記載がある。出版年は記されていない。若宮2014でヨーゼフによるポプリ〈ロメオとジュリエット〉を考察した際、同ポプリは『ポプリ選集』第107巻として1867年に刊行されたと判定した(若宮2014: 78)。ポプリ〈アストルガ〉は同選集の第105巻であるので、当然ながら1867年、もしくは67年以前に出版されたとみなすことができる。『ポプリ選集』の第101～108巻までのラインナップを表2に示す。

表2：『ポプリ選集』のラインナップ

巻 数	原曲のオペラ／オペレッタ／バレエ									
	作曲者：題名* (ジャンル) **	初 演***				ウィーン初演				
		年	月	日	場 所	年	月	日	場 所	
102	Offenbach: La vie Parisienne (Ot)	1866	10	31	パレ・ロワイヤル (パリ)	1867	1	31	アン・デア・ ウィーン劇場	
103	Ricch: Crispino e la Comare (O)	1850	2	28	テアトロ・サン・ベネ デット (ヴェネツィア)	1867	5	10	ケルンテン門脇 の宮廷劇場	
104	Offenbach: Die Grossher- zogin von Gerolstein (Ot)	1867	4	27	ヴァリエテ座 (パリ)	1867	5	13	アン・デア・ ウィーン劇場	
105	Abert: Astorga (O)	1866	5	27	宮廷歌劇場 (シュトゥットガルト)	1870	7	30	カール劇場	
106	Verdi: Don Carlos (O)	1867	3	11	オペラ座 (パリ)	1932	5	10	宮廷歌劇場	
107	Gounod: Romeo und Julie (O)	1867	4	12	リリック座 (パリ)	1868	2	5	ケルンテン門脇 の宮廷劇場	
	後に上記作と差替 Müller: Liebeszauber (Ot)	1856	11	28	アン・デア・ウィーン 劇場 (ウィーン)	同 左				
108	Offenbach: Nach dem Zapfenstreich (Ot)	1867	7	9	クアザール (バート・エムス)	1868	2	13	カール劇場	

注) * 題名は『ポプリ全集』出版時のタイトル、** ジャンルはO＝オペラ、Ot＝オペレッタ、B＝バレエ

*** ウィーン初演の日付は当時の新聞各紙の広告による。

表3：ポプリの構造とオペラとの関連

ポプリの構造						オペラの対応箇所				
区分	小節 番号	小節 数	拍子	調	テンポ	オペラのナンバー	小節 番号	拍子	調	テンポ
I	001-023	23	4/4	e	Adagio	Ouverture	001-023	4/4	e	Adagio
	024-057	34	3/4	E	Maestoso		024-057	3/4	E	Andante Maestoso
II	058-117	60	6/8	A	Allegretto	Act1: No.1 Lied: Wenn Herrliche (Eleonore)	113-170	6/8	A	Allegretto
III	118-186	69	6/8	D	Più animato	Act1: No.2 Terzett Ich habe errungen ihr Herz (Eleonore, Balbaces, Farnese)	136-204	6/8	Des	Allegro vivace
IV	189-220	32	4/4	Es	Adagio	Act2: No.5 Recitativ und Arie: Stabat mater (Astorga)	057-083	4/4	Es	Adagio
	221-258	60	6/8	F	Andante	Act2: No.5 Lied: Wenn hart das Leben mich bedroht (Angioletta) (Astorga)	110-157	6/8	F	Andante con moto
							182-191			
V	259-317	59	2/4	As	Allegretto	Act2: No.8 Cavatine: Komm süß' Liebchen (Balbaces)	040-094	2/4	As	Allegretto
VI	318-351	66	6/8	As	Allegro	Act2: No.6 Barcarole: Horch, welch Klingen (Chor)	031-058	6/8	Es	Allegretto
	352-384	33	2/4	Des	Andante con moto	Act2: No.6 Barcarole: Wie schön ist sie! (Angioletta, Balbaces, Lauristan, Chor)	89-120	2/4	Des	Andante con mote
	385-410	26	2/4	D	Allegro	Act2: No.6 Barcarole: In der Oper sollst du (Chor)	164-189	2/4	D	Allegro
	411-494	84	2/4	B	(Allegro)	Act2: No.6 Barcarole: Erreichbar ist dir (Chor)	190-271	2/4	B	(Allegro)

注) オペラの小節番号はナンバーごとのカウント、インチピットは対応箇所の出だしの言葉を示した。

第104巻の原曲オペラ《大公女ジェロルスタン》は1867年にパリで初演された作品であり、オペレッタというジャンルの性格上、初演日より前に楽譜が出版されたとは考えにくいことから、ポプリ〈アストルガ〉の楽譜は1867年の出版と考えるのが妥当である²⁰⁾。それは、シュトゥットガルト初演よりも後であり、オペラのウィーン初演より前である。また、ライプツィヒのブライトコプフ社が1866年にすでにピアノ譜を販売したことは明らかであり、先にも引用した70年7月30日付の*Wiener Abendpost*紙では、「ピアノ譜が総じて情報を提供してくれる」(p.13)と書かれている。おそらくヨーゼフ・シュトラウスもピアノ譜を手にしていたに違いない。

5.2 ポプリの楽曲構造

それでは、ポプリ〈アストルガ〉の楽曲構造をみてみよう。曲の構造と原曲オペラとの関連を表3に示す。表の左にポプリの構造を、右に原曲オペラの対応箇所を示した。

ポプリは494小節から構成されており、6つの部分（Ⅰ～Ⅵ）に区分することができる。使用されているオペラのナンバーは6曲であり、それらが並置されている。オペラの順序が崩されているのはⅤの部分のみであり、第2幕No.8のバルバチェスによるカヴァティーネがNo.6よりも先に出てくる。モチーフはすべてが第1幕と第2幕から引用されており、第3幕からの引用はない。調性がオペラと異なるのはⅢであり、オペラの変ニ長調がニ長調に移調されている。拍子がオペラとポプリで異なる箇所はない。

各部分を細かくみていこう。Ⅰの部分は「序曲」の冒頭から57小節までを引用している。これは元来、18世紀の音楽家アストルガによ

る〈スタバト・マテル〉を引用した部分である（図版2の冒頭旋律を参照）。24小節からは拍子が3拍子に変わるが、これは序曲のそのままである。第57小節で3拍子部分が終わり、序曲は拍子を4分の4拍子に変更して、第58小節から第453小節までつづく。しかし、ポプリにおいては4分の4拍子によるヴィヴァーチェ部分は引用されていない。

Ⅱの部分は、第1幕No.1のリート“Wenn Herrliche, du in stiller Nacht”からの引用である。合唱部分とエレオノーレによるレチタティーヴォ（第92～112小節）は省かれ、リートの前奏にあたる第113小節から、第170小節の1番カッコの終わりまでが引用されている。

Ⅲの部分は、第1幕No.2の三重唱（エレオノーレ、バルバチェス、ファルネーゼ）からの引用である。第1～135小節のレチタティーヴォ（4分の4拍子）が省略され、第136小節からの8分の6拍子部分“Ich habe errungen ihr Herz”が引用されている。ここは、先に述べたように、原調の変ニ長調がニ長調に移調されている。

Ⅳ以降は第2幕からの引用である。Ⅳの部分は、第2幕No.5のアリア“Stabat mater”、すなわちアストルガ作曲による〈スタバト・マテル〉からの孫引きとなる。第1～56小節のレチタティーヴォを省略し、アストルガが歌う〈スタバト・マテル〉（第57～83小節）を引用している。続く第84～109小節のレチタティーヴォをとばし、第110小節からのアンジョレッタによるリート“Wenn hart das Leben mich bedroht in Pein und North”を引用している。引用部分は第110～157小節で、第158～182小節のレチタティーヴォを割愛し、第182～191小節の後奏部分を接続している。Ⅴの部分は、第2幕No.8のバルバチェスによ

るカヴァティーネ²¹⁾からの引用である。冒頭から第39小節のレチタティーヴォが省略され、カヴァティーネ全体（第40～94小節）がそのまま引用されている。

Ⅵの部分は、第2幕No.6からの引用であるが、No.6は複合的な長い場面である。まずはNo.6の冒頭にあるバルカローレが引用される。このバルカローレは、オペラの中ではアカペラ部分（第1～29小節）とオーケストラ伴奏付の反復部分（第30～58小節）から構成されている。言うなれば、1番と2番に相当する詩節構造であり、ポプリにおいても、1番と2番を含めた長さを演奏するが、オーケストラ伴奏付の部分を反復する形式に改められている。その際、歌の冒頭1小節が欠落しており、引用されたバルカローレは歌の途中から始まる。また、オーケストラが奏でるアルペジオが歌の間に混入しているのも特徴である。オペラの第58～88小節のレチタティーヴォは省略され、第89小節からの騎士の合唱“Wie schön ist sie!”に直接接続する（第120小節まで）。ここでは原調の変ニ長調がそのまま使われている。さらに騎士の合唱の第164～189小節、すなわち“In der Oper sollst du glänzen”（ニ長調）と、続く第190～271小節の“Erreichbar ist dir jedes Ziel”（変ロ長調）の部分までを引用して、ポプリは終曲する。変ニ長調とニ長調の接続は、調構造からみれば、強引に感じられる。

全体的なバランスはⅠ＝57小節（全体の10%）、Ⅱ＝60小節（11%）、Ⅲ＝69小節（13%）、Ⅳ＝92小節（17%）、Ⅴ＝59小節（11%）、Ⅵ＝209小節（38%）である。圧倒的にⅥの割合が傑出している。しかも、6月18日と21日にフォルクスガルテンで演奏された抜粋箇所がここに含まれると考えられる。

抜粋とポプリの関係は、ヨーゼフ・シュトラウスが手掛けた〈ロメオとジュリエットに基づくポプリ〉とは異なることがわかる。ポプリ〈ロメオとジュリエット〉では、抜粋部分はポプリに含まなかったからである（若宮2014: 82-83）。

また、先にポプリの定義を示した際、「[オペラの中の] 最も重要かつ効果的なメロディーだけを使って…つなぎあわせた曲」（Ballstaedt 1997: 1760）と説明したが、これは完全には当てはまらない。オペラの中でもっとも印象的である、アンジョレッタによる第1幕No.3のアリア“*Italiens armes Kind*”や同じく第1幕No.4の賛歌“*Wie bist du gross, o Liebe*”がポプリには含まれないからである。声楽主体のオペラと、器楽で演奏するポプリの制作上の違いがここに現れている。

6 結論

1866年にドイツで初演されたオペラ《アストルガ》。このオペラは初演から4年後の70年にウィーンで上演された。一方、同じオペラのモチーフを使用して、ウィーンのヨーゼフ・シュトラウスが作り上げたポプリは67年に成立したと認定できる。これはシュトゥットガルトにおけるオペラ初演の翌年にあたる。上記に示した3時点、すなわち66年、67年、70年を結びつける糸は存在するのか。66年と70年は主演歌手ゾントハイムによって結ばれる。しかし、ヨーゼフによるポプリはオペラ上演とは結びつかないようにみえる。それではなぜヨーゼフは、67年にポプリを手がけたのか。表2「『ポプリ選集』のラインナップ」からわかるように、ウィーンでの初演が原作よりも相当遅れた作品はある。『ポプリ選集』第106巻〈ヴェルディの《ドン・カルロ》

に基づくポプリ」のように、原作初演から半世紀以上も経ってウィーンでの上演が適った作品がその好例である。しかし、その場合には検閲などの事情が存在した訳で、ウィーンで初演されてからは長く作品が上演し続けられている。シュトラウス楽団の事前演奏がオペラ上演の機運を高めた事例も枚挙にいとまがない²²⁾。ただし、《アストルガ》はそれとは別の経路を辿っている。同オペラのウィーン上演はわずか2回という失敗であった。《アストルガ》にウィーンの聴衆に好まれない要素が内包されることは、ブライトコプフ社のオペラ・ピアノ譜をみた専門家には明白だったのであろう。しかし、ポプリは制作されたのである。〈アストルガに基づくポプリ〉の制作を考案したのが誰だったのかはわからない。楽譜に名前が明記されているヨーゼフ・シュトラウス²³⁾であったのか、それとも出版主のシュピーナであったのか。いずれにせよ、ポプリの楽譜出版は大衆の購買を期待するものである。業界に精通した出版人が目算を誤ることは減多にないことであろう。大衆相手のビジネスを展開するシュトラウス楽団の楽長ヨーゼフも同様である。ただし、作曲家としてのアーベルトとヨーゼフには共通点も認められる。両者がヴァーグナー崇拝者であった点である。ヴァーグナー風の様式にヨーゼフが共感を覚えた可能性は否定できない²⁴⁾。しかし、その解明にはさらなる資料の発掘と調査が必要である。

【注】

- 1) シュピーナ社の『ポプリ選集』は長い伝統を持つシリーズである。「〈ドニゼッティのアンナ・ボレーナに基づく幻想曲〉を第1巻として1839年頃

にメケッティが創始したシリーズで、ピアノ演奏用楽譜として20年以上も市場に提供された続けた」(若宮2014: 77)。しかも、このシリーズは後継出版社によって出版され続けた。収載曲のすべてが劇作品の音楽モチーフから構成されている。詳細は、若宮2014: 77, 84を参照。

- 2) グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》はパリ万博開催中の1867年4月27日に初演され、約2週間後にウィーン上演された。その後、同年7月24日にヨーゼフによるポプリはシュトラウス楽団によって演奏されている(若宮2014: 80-81)。
- 3) 新発見したヨーゼフ・シュトラウスによるポプリ2曲が、既刊の作品目録5点(Weinmann 1967, Schönherr 1982, Kemp 2001, Mailer 2002, Linhardt 2006)に掲載されていないことは、若宮2014に記した通りである(若宮2014: 76)。目録作成者のひとりである、イギリスのPeter Kemp氏(Kemp 2001の著者)が、2曲のポプリが新発見であることを2015年6月9日付の筆者宛のメールで証言している。“I felt I had to write to you to offer my heartfelt congratulations on your discovery of two 'lost' Josef Strauss potpourris, based on the music from Abert's *Astorga* and Gounod's *Roméo et Juliette*. This is sensational! I note that even Professor Franz Mailer does not include mention of either potpourri in his biography *Joseph Strauss: Genie wider Willen* or in his later *Joseph Strauss. Kommentiertes Werkverzeichnis*. Somehow, I also missed including them in the worklist I compiled for my Josef Strauss entry for *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. Second Edition (2001).” ヨーゼフ・シュトラウスのポプリ作品の現存状況についても、若宮2014: 76に示した。
- 4) 《アストルガ》以外のオペラは、以下の通りである。“Anna von Landskron” (初演: 1858年12月19日, シュトゥットガルト宮廷歌劇場), “König Enzo” (初演: 1862年5月4日, シュトゥットガルト宮廷歌劇場), “Enzo von Hohenstaufen” (初演: 1875年4月11日, シュトゥットガルト宮廷歌劇場), “Ekkhard” (初演: 1878年10月11日, ベル

- リン宮廷歌劇場), “Die Almohaden” (初演: 1890年4月13日, ライプツィヒ市立劇場).
- 5) アストルガのウィーンにおける初演日について、若宮2014では、アントン・パウアーの目録 (Bauer 1955: 8) に典拠して1870年6月24日とした。しかし、これは誤りであった (若宮2014: 78)。当時の新聞広告数紙にあたって、70年5月27日と確認した。
 - 6) 引用記事は《アストルガ》のウィーン上演日に掲載された紹介記事である。
 - 7) アストルガについてわかっていることはきわめて少なく、現代の諸事典類の記述と比較しても、引用記事の方が詳しい。
 - 8) 1834年にローベルト・シューマンによって発刊されたドイツで最も権威のある音楽雑誌。
 - 9) カール劇場の通常の演目は、オペレッタや笑劇が主体であった。
 - 10) レンベルクは独語の地名、現在はウクライナのリヴィウ。
 - 11) 各オペラの上演日は以下の通り。“Der Postillon von Lonjumeau” : 7月5日、7月14日、7月27日、8月20日、“Die weisse Frau” : 7月8日、7月11日、7月22日、8月16日、“Astorga” : 7月30日、8月2日、“Martha” : 8月5日、“Der Liebestrank” : 8月10日、8月12日、8月18日、ガラ公演: 7月16日、7月20日、8月14日。オーケストラのための慈善ガラが8月23日に実施された。
 - 12) 1868年、ゾントハイムは4月15日～5月8日、さらには7月6日～8月15日の2度にわたってウィーン宮廷歌劇場に客演した。
 - 13) エアレザルは偏屈なユダヤ人の彫金師。ゾントハイムは《ユダヤの女》の他に、“Robert der Teufel” , “Lucia von Lammermoor” , “Die Stumme von Portici” , “Die Afrikanerin” , “Fidelio” , “Der Troubadour” , “Die Afrikanerin” に出演した。
 - 14) 《ユダヤの女》の上演日は以下の通り。4月15日、4月20日、5月1日、5月8日、7月6日、7月15日、8月6日、8月15日。
 - 15) ゾントハイムは1869年7月26日から8月30日までウィーンに滞在し、カール劇場で12公演に出演した。
 - 16) 8月2日付の*Neue Freie Presse*紙, pp.7-8。
 - 17) 上掲紙, p.7。
 - 18) 楽長の仕事は、楽団演奏用の楽曲の作曲、他の作曲家による楽曲の選択、指揮、楽団運営などであった。
 - 19) オペラ《ロメオとジュリエット》からの抜粋は1867年6月25日、28日、7月2日にも演奏されている (若宮2014: 80-81)。
 - 20) オペレッタは時事性のあるジャンルであり、長い準備・稽古期間は費やさない。
 - 21) カヴァティーネとは、素朴な性格の歌謡的な歌のこと。19世紀には、アリア、レチタティーヴォとは区別した形式を有した。
 - 22) 楽団によるオペラからの抜粋の演奏に加え、オペラのモチーフを用いた諸作品 (ボプリ、カドリリュ) の演奏でオペラ上演の地歩を築いた (若宮2013: 23)。
 - 23) 1860年代の『ボプリ選集』では編曲者名は記されておらず、ヨーゼフ・シュトラウスの2曲のボプリで編曲者が記されていることは異例である (若宮2014: 84)。
 - 24) アーベルトがヴァーグナーの傾倒者であったことはAbert 1983に、《アストルガ》における彼の影響は1870年8月2日付*Neue Freie Presse*紙 (p.7) に書かれている。ヨーゼフ・シュトラウスへの影響は若宮2012を参照。

[参照新聞]

オーストリア国立図書館: “ANNO [AustriaN Newspaper Online] = Historische Österreichische Zeitungen und Zeitschriften.” <http://anno.onb.ac.at/>で閲覧。参照新聞は以下の通り。“*Die Presse*” , “*Fremden-Blatt (FB)*” , “*Neue Freie Presse*” , “*Neues Fremden-Blatt (NFB)*” , “*Neue Zeitschrift für Musik*” , “*Wiener Zeitung*” , “*Wiener Abendpost*” , “*Zellner’s Blätter für Theater, Musik und bildende Kunst.*”

[参考文献]

- Abert, Anna Amalie. “Abert”. in Finscher (MGG),
Personenteil Bd. 1, pp.41-43. 1999.
- Abert, Hermann. *Johann Joseph Abert (1832-1915)*
Sein Leben und seine Werke. 1916. 2nd ed. Bad
Neustadt a.d. Saale: Dietrich Pfahler. 1983
- Abert, Johann Joseph. *Astorga*. Leipzig: Breitkopf
und Härtel. 1866.
- Astorga, Emanuel. *Stabat mater*. Leipzig: C. F.
Peters. Plate 7284. n.d.
- Ballstaedt, Andreas. “Potpourri”, in Finscher (MGG)
1994-2008, Sachteil Bd.7, pp.1759-1761. 1997.
- Bauer, Anton. *Opern und Operetten in Wien*. Graz;
Köln: Hermann Böhlaus. 1955.
- Brandenburg, Daniel. “Astorga”. in Finscher (MGG),
Personenteil Bd. 1, pp.1095-1098. 1999.
- Brusatti, Otto and Sommer, Isabella. *Josef Strauss*
1827- 1870 Delirien und Sphären Klänge. Wien:
Holzhausen, 2003.
- Finscher, Ludwig, ed. *Die Musik in Geschichte und*
Gegenwart (MGG). 21 Bände. Kassel:
Bärenreiter. 1994-2008.
- Hofmeister, Friedrich, ed. *Musikalisch-literarischer*
Monatsbericht. Leipzig: Hofmeister. <http://www.hofmeister.rhul.ac.uk/2008/content/database/database.html>で閲覧.
- Kemp, Peter. “Strauss”, in Saidie 2001, vol.24,
pp.474-496. 2001.
- Kutsch, Karl Josef and Riemens, Leo. *Großes*
Sängerlexikon. Dritte erweiterte Auflage. 4
Vols. Bern; München: K.G.Saur. 1997.
- Linhardt, Marion. “Strauß”, in Finscher (MGG) 1994-
2008, Personenteil Bd.16, pp.11-54. 2006.
- Mailer, Franz. *Joseph Strauß. Genie wider Willen*.
Wien; München: Jugend und Volk. 1977.
- *Johann Strauß (Sohn). Leben und Werk in*
Briefen und Dokumenten. Bd.2: 1864-1877.
Tutzing: Hans Schneider. 1986.
- *Johann Strauß. Kommentiertes Werkverzeichnis*.
Wien: Pichler. 1999.
- *Joseph Strauss: Kommentiertes Werkverzeichnis*.
Frankfurt a.M.: Peter Lang. 2002.
- Sadie, Stanley. ed. *The New Grove Dictionary of*
Music and Musicians. 2nd ed. 29 vols. London:
Macmillan. 2001.
- Schönherr, Max. *Lanner, Strauss, Zieler*. Wien;
München: Doblinger. 1982.
- Strauss, Josef. *Potpourri über Motive der Oper*
ASTORGA von J. Abert. Anthologie musicale,
No.105. Wien: C.A.Spina. 図書館所蔵番号 A-Wn:
MS4572-4° /1,31. [1867]
- *Potpourri über Motive der Oper Romeo und*
Julie von Ch. Gounod. Anthologie musicale,
No.107. Wien: C.A.Spina. 図書館所蔵番号 A-Wn:
MS4572-4° /1,34. [1867]
- Troger, Dominik. “Oper in den Wiener
Vorstadttheatern: Das Gastspiel Heinrich
Sonthems am Wiener Carltheater im August
1869”. 2002. [www.operinwien.at/chronik/](http://www.operinwien.at/chronik/Material/sontheim.htm)
[Material/sontheim.htm](http://www.operinwien.at/chronik/Material/sontheim.htm)で閲覧.
- Wakamiya, Yumi. “Ein verlorenes Potpourri von Josef
Strauss: Potpourri über Motiven der Oper
Romeo und Julie”. *Leues Leben*, Heft.51.
Coburg: Deutsche Johann Strauss Gesellschaft.
2016 (刊行予定) .
- Weinmann, Alexander. *Verzeichnis sämtlicher*
Werke von Josef Strauß und Eduard Strauss.
Wien: Ludwig Krenn, 1967
- 鍵山由美 [若宮由美] 「1840年代のウィーンにおける
ポプリとカドリユーの関連：パルプの《ハイモ
ンの息子たち》に関する考察」『お茶の水音楽論
集』（お茶の水女子大学）第10号, pp.1-13. 2008.
- 若宮由美 「ヨーゼフ・シュトラウスによる初期ピア
ノ曲の記譜法」『帝京大学文学部教育学科紀要』
第37号, pp.53-67. 2012.
- 「ヨーゼフ・シュトラウス考②〈劇場カドリユー〉
から垣間見るウィーン劇場界」『日本ヨハン・
シュトラウス協会会報』第292号, pp.22-24.
2013.
- 「ヨーゼフ・シュトラウスの〈ロミオとジュリエッ
ト〉—グノーのオペラに基づくポプリ」『埼玉
学園大学人間学部紀要』第14号, pp.75-87. 2014.